

教科主張

生活科の本質

私たち生活科部は、身近な人、社会及び自然という対象を自分とのつながりで考え、自分や友達の見方や考え方を生かして、生活を豊かにしていこうとすることこそ生活科における学びと考える。

対象に出合った子どもはそれぞれのやり方で自ら対象と結びついていく。対象とくり返し結びつく中で「もっと〇〇したい」と自分の思いをもち、先行経験や活動を通して得た見方や考え方を生かしながら、思いの実現に向かって主体的に活動する。その過程で、意識していなかったことが気付きとして自覚化されたり、一人ひとりの気付きが関連付けられたことによって新たな気付きが生まれたりして、気付きの質が高まっていく。その中で達成感や満足感などを得た子どもは自分自身の成長を実感する。このような経験をくり返すことで、主体的に取り組んだり、今後やりたいことを吟味したり見つけ直したりしようとする原動力が生まれ、次の活動や日々の生活への意欲や期待を高めていく。子どもは自ら対象と関わっていく中で、自分の見方や考え方を広げたり人との関わりを深めたりすることを通して、生活を豊かにしていこうと考える。

生活科の考える『その子らしく学ぶ』とは ～人間性の涵養につながる経験～

私たちは「その子の背景や活動の中で生まれた見方や考え方を基に、やりたいことを吟味したり見つけ直したりするなど試行錯誤をしながら思いの実現に向かうこと」を生活科における『その子らしく学ぶ』であると考えている。

対象に出合った子どもは「知りたい」「やってみたい」と興味をもち、自ら対象と結びついていく。そこには、その子の知識や先行経験、見方や考えなどが影響しているだろう。そして対象とくり返し結びつくことで、思いが生まれたり膨らんだりしながら、自分のやりたいことを明確にしていく。

思いをもった子どもがその子ならではのやり方で対象と結びつくことで、そ

の子ならではの気付きが生まれる。その気付きを基に子どもはさらに対象と結びつき試行錯誤を重ねることで、自分を軸にした学びを進めていく。その中で友達と思いを伝え合ったり高め合ったりして、その子の見方や考え方が広がることもあるだろう。そして「自分が本当にやりたいことは何だろう」と吟味したり見つけ直したりして、その子とその時に働かせる見方や考え方が焦点化され、思いの実現に向かっていく。

このように生活科の目標や内容等の習得に向かっていく中で、子どもが思いの実現に向けて試行錯誤した過程が「人間性の涵養につながる経験」となる。見たり触ったりして直接、対象と結びつくことの多い生活科においてこのような経験をすることは、子どもが今後の自分の生活をより豊かにしていこうとする基盤となるだろう。